

もういちど、
自然や歴史から

わかまち、竹原を考えよう

2017年2月25日(土) AM:竹原の川を巡るまちあるき

PM:哲学対話@竹原商工会議所

【竹原まちあるき】

午前中のまちあるきでは、「竹原の川」を中心に見て歩きました。まず賀茂川を遡り、江戸時代までは海への河口付近であった現在の小早川神社付近①の様子を観察した後、かんぱの宿あたりの田万里川(たまりがわ)と賀茂川が合流する地点②や仁賀ダム③へ行き、川と山の現状について解説がありました。竹原は、自然を利用して産業が成り立ってきた歴史があることを実感。最後に、空港へ向かう432号線沿いにある葛子川(かつらこがわ)④の荒れた現状も見学しました。そして、田万里川や葛子川が、賀茂川に比べて管理が行き届いていないという現実、そして空港から竹原への玄関道路の整備も遅れているという指摘もありました。



葛子川④



小早川神社①

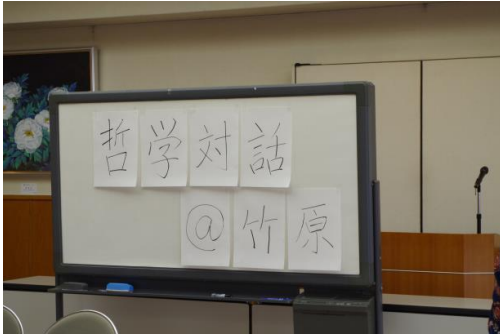


仁賀ダム③



賀茂川・田万里川合流地点②





【哲学対話@竹原】

午後 1 時から、25 名程が集まって哲学対話が実施されました。皆さん、初めての哲学対話で、何をするのか不安な様子でしたが、上智大学哲学教授、寺田先生の「午前中のまちあるきで感じたことを自由にご発言いただくところから始めましょう」という優しい問いかけで始まりました。

ある参加者から、「私たちは、自分たちのいいものを全然知らない。歴史の視点からみるといつもの風景の見え方が違って見えました。誇りをもって、もっとわがまちを宣伝して、いいまちづくりができればよいなと思いました」という率直なご意見や、「地下水がいいんだよね。だからいい酒ができる場所なんだ。空気と一緒にそれが普通に存在している自分たちでその良さに気づいていない」など、普段気づかない竹原の良さについて、色々なご意見が語られました。

竹原の名前の由来について質問が出ると、「竹が多いから竹原といわれたんだろう」とか、「このあたりは、竹原氏が荘園を持っていたから」など諸説が出て、竹原の話で盛り上がる一方、東京から参加した人からの、「みなさん良く地元のことをご存知だと思った。私たちは自分の住んでいる町のことをそんなによく知らない。なぜ自分のまちの歴史や成り立ちをこんなにご存じなのでしょうか」という質問に、「歴史の本や言い伝え、テレビなどの情報から自然と覚えた」「わがまちを知らないと恥ずかしい、という自覚があるのかもしれない」と、竹原のことを語る事ができるのは当然といった様子で答えていらっしゃいました。

一方、竹原の現状について、「今このまちでは、若い人と年配の人たちで考え方や生活・文化面でギャップがあったりして、若い人は周りから干渉されるのが嫌で出て行ってしまった」「ここには仕事がないから戻ってくる事ができない」と若者が減っている寂しさを口にされる参加者も。「この地域をよくするには個人ではできなくなっている。郷土愛は強いので皆で何とかしたい」という切実な想いも語られました。

15分の休憩を挟んで、後半は「竹原をよくするというのはどういうことか」という“これから”にフォーカスした問いで考え始めることにしました。



参加者からは、「竹原市民が竹原を好きになること」「竹原以外からも人がたくさん来ること」、そのためには、「他との違いを際立たせる必要がある」などの意見が出されましたが、「外の方にあんまり来てほしくないという人も多いんじゃないか」「住んでいる人間にとって住みよさを大事にする必要があるのではないかと」と、「良い」竹原とは何かについて、それぞれの意見が出されました。

竹原をよくするために、観光面での発展を期待する声として、「竹原の海の素晴らしさ、瀬戸内海の素晴らしさを観光に活かさないかと思う」「竹原には山もある。自然の資源と人間の心がどう結び付くのか考え、お客さんを大事にお迎えする気持ちが大切なんじゃないか」といった意見がでたところで、ファシリテーターから、「たくさんの方がこの町に来るとなるとよいのでしょうか」という問いが出され、一瞬皆さんが考える沈黙の時間が流れました。

そして 40 歳代の方から、「“住みたい”と思う町と“行きたい”と思う町は、違うのかもしれない」「竹原に住みたい町かという、竹原には足りないものがいっぱいあると思う。大きな病院も産院もない。住民の生活面での充実があって初めて良い町と言えるんじゃないか」と、住む人にとってよい町とは、「生活の充実」であるという意見が出されました。その他、「潤いがある、平和で、気持ちよく暮らせる生活が基本」「心豊かに安心して生活できること」などの意見も相次ぎました。



ファシリテーターから、問いが続きます。

「今日、最初に皆さんが話していたことをからは、皆さんはこの町が好きということがわかり、このまちは潤いがあるって自然に囲まれ、安心して生活しているという印象を受けました。そうだとすると、安心して暮らせるという目的はすでに達成されているのではないのでしょうか」

それを受けてご年配の方からは、「子供世代が帰ってこないから寂しい」「ここは好きで離れたくないけれど、体が動かなくなったらどこかにいかなくちゃならないと思ったら不安」「この町は好きだけどすべてに満足しているわけじゃない。今の時代に合った生活水準になっていないし、ここで安らかに死ぬるとは思わない」「子供から大人までバランスよく人がいることが潤いがあるということなのかも」「実際、人口が減って働くところがないのもさびしいし、前向きに考えられない」という意見も出されたところで、時間切れとなってしまいました。

最後に、今日のセッションをファシリテーターが振り返って、次のようにまとめました。

「竹原を良くしたいと思って皆さん集まっていたいただきましたが、良くなるとはどういう事かについては少しずつ皆さんに違いがあることがわかりました。そういった意見を出し合って、コミュニケーションをとって触発し合わないといいものにならないかもしれませんね。行政レベルの前段階として、考えを共有して耕す時間を持ちたいと思いました。哲学のはじまりは、時々立ち止まってじっくり・ゆっくり考えることです。普段はあまり考えないことを他の人と言葉を交わしながら掘り下げていくというのが哲学対話です。ソシエトスの地方創生の活動にも絡めて、これを一つの出会いとして、竹原の皆さんとまたこのような機会を持てれば、と思っています」